

いのちを守る体育

大阪体育学会理事長

河鱒一彦

先日、平成 24 年度大阪体育学会大会が大阪体育大学でおこなわれた。テーマは「いのちを守る体育」でした。非常に意義ある内容となったことをまず会員の皆様に報告させていただきます。さて、日本に生きる我々は「東日本大震災」から 2 年過ぎた日々をむかえることになりました。1000 年に一度の津波、否私が参加しました研究会において防災の専門家は「津波の特徴などから推察すると 3 万年に一度の確率で発生するようなものであった」との見解を述べておりました。いずれにしても未曾有の津波をおこすような震災であったことは間違いのないでしょう。しかし、このような津波被害の中、学校管理下の小・中学校生徒がひとりも亡くなることがなかった市があります。ご存じのとおり岩手県釜石市です。防災教育の成功例として広く語られています。話を簡単にしますが、釜石市のある地区では中学生がまず高台に向かい逃げ、これを小学生が追い、中学生が幼い小学生の手を引き、一緒に逃げていた保育園の先生(園児を抱いていたり、散歩用の台車に乗せていたりしていた)を助けてより高い場所を目指し非難を続けていったそうです(命を守る教育；片田敏孝著)。

話は変わりますが、これまで 20 世紀から 21 世紀の「体育」が掲げた目標のうち「健康」があげられることについて異論は少ないでしょう。しかし、先日、全身美容整形を施したひとが「私は健康のために食餌制限はしないし、まして運動なんて大嫌い」「じゃ、脂肪が貯まったらどうするの?」「脂肪を吸引してもらおうわ」という内容のメディアを視聴しました。この話から体育が身体運動をツールとして健康へのアプローチ目指してきたことが科学の発達により人々から軽視される方向にすすんでいくのではないかと私は感じました。「体育」は何のために存在するのか?「体育のレゾンディテール」が問われのではないかととも思いました。体育の重要性、もっと単純に歩くこと走ることができる体力、自らを移動させることができる力のつけることの大切さをこどもたちに説いても「先生走らんでもチャリあるしバイクも車もあるで」といわれそうな気がします。平和な自然の脅威のないことは素晴らしいことですが、走ることはおろか歩くことの必要性、重要性を教えることが先に述べた風潮と相まって現代社会では困難になっているような気がします。

しかし、東日本大震災の釜石市の例から「いのちを守る」防災教育の一部分のために我々体育人が貢献できる可能性を見いだすことができるのではないかと私は考えます。ーいのちを守る創造ー多くの方々が犠牲になった大震災から生かされた我々が得た教訓を生かし、発展させること。このことが亡くなられたおおくの御霊に対して、生かされている体育人が果たしていくべき責務ではないかとの思いを巡らせている。

追記

今回の私が提供した話題は学校管理下の生徒、特に義務教育以下の生徒に限定されること
をご理解ください)